



**Data**

監督：廣木隆一  
 原作：廣木隆一 「彼女の人生は間違いじゃない」(河出書房新社刊)  
 出演：瀧内公美/高良健吾/光石研  
 /柄本時生/篠原篤/蓮佛美沙子/戸田昌宏/安藤玉恵/波岡一喜/磨赤児/小篠恵奈/毎熊克哉/趣里

## 👁️👁️ みどころ

東日本大震災の津波で母親を失ったみゆきは、市役所に勤めながら仮設住宅で父親と2人暮らし。農業しかできない父親は、酒とパチンコ浸りの毎日だ。そんな中、彼女は毎週末、英会話教室に通うため夜行バスで東京まで行っているそうだが、それは真つ赤な嘘。実は渋谷でデリヘル嬢を……。それは一体何故？

韓国のキム・ギドク監督が『STOP』(17年)製作のため1人で福島に乗り込み、監督、脚本、撮影、録音、編集、配給したのに対し、廣木隆一監督は、自分で小説を書き、それを映画化。しかして、そのテーマは？焦点は？

瀧内久美という女優はグッド！演技も良ければ、脱ぎっぷりも良し。脇役の高良健吾もグッドだ。

被災者の気持ちに寄り添うことは難しくても、みゆきが何故そんな生き方をしているのかについて、みんなで一緒に考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□廣木隆一監督が自分自身の処女小説を映画に！■□

私は廣木隆一監督の『ヴァイブレーター』(03年)を観ていないが、『M』(07年)、『シネマルーム16』372頁参照)、『軽蔑』(11年)、『シネマルーム27』170頁参照)、『さよなら歌舞伎町』(15年)、『シネマルーム35』214頁参照)という、男女の情愛をテーマにした映画はしっかり鑑賞している。その廣木監督が、自分自身の故郷である福島が2011年3月11日の東日本大震災で大被害を受けたことを受けて、はじめて書いた小説が『彼女の人生は間違いじゃない』。

日本では近々、韓国のキム・ギドク監督が東日本大震災の報道を受けて、1人で監督、脚本、撮影、録音、編集、配給した映画『STOP』（17年）の公開が始まる。私は、一足早くこれを宣伝用DVDで鑑賞したが、これはキム・ギドク監督ならではのものすごい問題提起作だった。それに対して、廣木監督が自分で書いた小説を自分で映画化した本作は、東日本大震災の津波で母親を失い、今は福島の実設住宅で父親の金沢修（光石研）と2人で生活しながら市役所に勤務している女性、金沢みゆき（瀧内公美）が主人公。普通、市役所勤務の地元のお嬢さんといえば、地元で一番真面目な女の子を想像するが、廣木監督の設定では、何と彼女は父親には英会話教室に通っていると嘘をついて、毎週末夜行バスで東京へ通い、渋谷でデリヘル嬢をしているらしい。ええっ、そんなことってあるの？それは、お金のため・・・？いやいや、そうでない。そのことは地元での彼女の勤勉な生活ぶりから明らかだ。しかして、なぜ彼女はそんな仕事を・・・？

## ■□■この女優はグッド！演技にも、脱ぎっぷりにも注目！■□■

同じ日に観た韓国人監督ユン・ソクホの『心に吹く風』（17年）は、映画の出来もイマイチなら、ヒロイン女優の真田麻垂美もセリフは棒読み近く、アップもあまり見栄えがしない容姿だった。それに対して、本作のヒロインみゆきを演じた瀧内公美は、廣木監督がオーディションで選んだというだけあって演技も素晴らしいうえ、「R15」と指定された本作での脱ぎっぷりも素晴らしい。

スクリーン上では彼女が1人で高速バスに乗り、渋谷のデリヘルで送り迎え兼ガードマン役の男三浦秀明（高良健吾）と共に「お仕事」をする様子が映し出されるが、なるほどデリヘルのお仕事ってこんなもの・・・？そんな彼女が、父親と2人で過ごしている仮設住宅では、毎日の家事をきちんとこなしつつ、父親にはしっかり小言を言い、市役所では真面目に仕事をする姿見ると、この女はジキルとハイド・・・？そんな二面性にビックリ！近々鑑賞予定の『世界は今日から君のもの』（17年）では、近時人気急上昇の女優門脇麦が主演するが、彼女は三浦大輔監督の『愛の渦』（14年）での脱ぎっぷりとあえぎぶりがお見事だった（『シネマルーム32』未掲載）。本作では、それと同じレベルの過激なセックスシーンはないが、みゆきのデリヘル嬢としての奮闘ぶりに注目！

## ■□■若手イケメン俳優・高良健吾もいい味を・・・■□■

風俗店で女の子の送り迎え兼ボディガードをしている男。そんな男には概ねロクな奴はいないはずと思っていたが、本作にみる三浦は意外にいい奴・・・？『新宿スワン』（15年）では、今をときめく若手イケメン俳優・綾野剛が新宿でキャバクラ嬢をスカウトするのがお仕事という面白いキャラを演じていたが、映画の出来としては単純でイマイチだった（『シネマルーム35』未掲載）。

それに対して、本作にみる三浦はほどほど自分の仕事に真面目だが、同時にほどほどの距

離を置いているらしい。また、この業界においては女の子は商品だからそれに手を出すのはご法度だが、三浦はきっちりそれを守っているらしい。さらに、本作中盤に登場するみゆきを採用面接する(?)回想シーンでは、『新宿スワン』の綾野剛のように女の子を褒めて褒めて褒めまくるのではなく、「君には無理、止めたほうがいい」と何度も自分の気持ちを正直にぶつけているから、その真面目な姿(?)にビックリ!さらに、ある日彼がこの世界から引退する時のみゆきへのセリフは、「風俗の世界なんて、何年もやるもんじゃないぞ」という「おじさんセリフ」だから、それにもビックリ!

若松孝二監督の『千年の愉楽』(11年)で素晴らしい演技を見せていた高良健吾(『シネマルーム30』153頁参照)が、本作では出番こそ少ないものすごくいい味を見せているので、本作では龍本公美の素晴らしい演技と共に、この若手イケメン俳優の演技にも注目!

## ■□みゆきは元恋人に何故こんな行動を?みゆきの本命は?■□

本作最大の面白さは、みゆきが何故東京でデリヘル嬢をしているかを考えることだが、もう1つ、みゆきは元恋人に何故こんな行動を?みゆきの本命は?という面白いテーマもある。

本作には、元恋人の山本健太(篠原篤)から再びつき合いたいとの申し出を受けたみゆきが、自分からホテルへ行こうと大胆な提案をし、東京でデリヘルの仕事をしていることをあえて告白するシーンが登場する。私はそれを、そんな告白を受けてもなお彼が自分を好きになってくれるのかどうかを試したかったという女心から出た行動だと理解したが、さて真相は・・・?スクリーン上では2人がラブホテルのベッド上に横たわるシーンが登場するが、そんな告白を受けた後の2人のてん末は・・・?福島の仮設住宅を中心とした狭いコミュニティの中でみゆきのそんな噂が広がればえらいことだが、そんな心配も含め、なぜみゆきは山本にそんな告白を・・・?

他方、みゆきを主役とした本作のストーリーで、三浦はあくまで脇役。しかし、三浦が一方では風俗の世界で働きながら、他方では劇団員として真面目に活躍していたというストーリー構成は興味深い。そして、それを知ったみゆきがわざわざその芝居を観に行くというストーリー展開を見ていると、廣木監督がこの男に大きな存在感を与えていたこともわかる。本作では、山本との関係に全然満足できなかったみゆきが、なぜかこの三浦との関係には充足感と満足感を覚えていく様子をしっかりと鑑賞したい。そんなストーリーラインを考えていくと、みゆきの本命は、ひょっとしてこの男・・・?

## ■□父親はこれでいいの?被災者の現状は?■□

キム・ギドク監督の『STOP』(17年)は、福島第一原発事故による放射能の影響によって奇形児が生まれてくるのではないかという問題(恐怖)を、キム・ギドク監督流の

何とも生々しい設定で問題提起した。しかし本作では、みゆきの生き方と対比させながら、農業しかできないみゆきの父親が仕事にありつけないため失意の中で酒とパチンコにうつつを抜かず姿が印象的だが、それだけでは被災者の現状に切り込んだことにならないのは当然。

そこで廣木監督は、父親の他に①みゆきの同僚で、これぞ地方公務員の典型ともいう男、新田勇人（柄本時生）、②補償金をパチンコにつき込みながら、それに何の疑問も感じていない男（毎熊克哉）、③被災者の心の病に乗じてインチキな壺を売る霊感商法の男（波岡一喜）、④被災地を訪れる女流写真家・山崎紗緒里（蓮佛美沙子）、⑤仮設住宅の隣の住人、夫（戸田昌宏）は東電に勤め、妻（安藤玉恵）は精神異常を来している夫婦、⑥卒論を書くため福島のスナックでバイトしながら取材を進める女子大生（小篠恵奈）、⑦みゆきが東京駅で遭う、みゆきと同じように毎週末新潟から夜行バスで東京までデリヘルの仕事にやってくる女性（趣里）等を登場させ、それぞれ面白い被災者たちの「生態」を見せてくれるので、それにも注目！

## ■□■被災者たちのこんな生態、あんな生態に注目！■□■

上記①～⑦の人物が見せる「生態」はすべて私には想定範囲内だが、私が面白いと思った生態の第1は、自分が浮き上がっていることを全く自覚せず、取材に協力してくれる新田に対して次々と生々しい質問をぶつけていく女子学生。私は「被災者の気持ちに寄り添う」といういかにも朝日新聞的な言い方が好きではないが、そうかといって何でもズカズカと遠慮なく被災者の心の中に入り込んでいく、この女子学生の無神経ぶりにはビックリ！今時こういう若者が増えていることが大いに心配だ。

面白い生態の第2は、父親の工場は津波で流され、母親は祖母と共に変な宗教にハマり家を出て行ったため、今はかなり年の離れた弟と2人で暮らしながら市役所の広報課に勤めている新田の真面目さ。お墓が津波で流されてしまったため新たなお墓を探している老夫婦の世話をする姿や、女流写真家・山崎紗緒里の写真展の支援をする姿等を見ていると、日本の市役所はこんな男の真面目さで成り立っていることを実感！他方、その分だけ取材協力してやっている女子大生の傲慢さにはうんざりだし、「頑張れ！福島」のチラシを見て新田が「頑張ってただよ」と思わず本音を漏らすシーンに同感！さすが若手演技派の柄本時生が、こちらも出番は少ないものの見事にそんな被災者の生態を見せてくれる。

第3に面白い生態は、みゆきが東京駅のトイレで時々遭うみゆきと同じように東京でデリヘル嬢をしている女性。みゆきは今デリヘル歴2年だが、この女性は何年？この女性は近々新潟から東京に引っ越してくるそうだが、それはデリヘル嬢を本業にするため？それともデリヘルを卒業して新たなステップアップのため？みゆきがいつデリヘルのための東京通いを辞めるのかも含めて、今の若い風俗嬢の生態のあり方を本作からしっかり考えたい。

## ■□■父親の再生は？ヒロインの心の再生は？■□■

本作はヒロインみゆきの「問題意識」を中心に展開する物語だから、その他の被災者をめぐるさまざまなサブストーリーがさらにと消化されるだけになっているのはやむを得ない。しかし、酒を飲んでパチンコばかりしていた父親が近所の子供に野球を教えたり、みゆきからたびたびお説教を聞いているうちに少しずつ仕事への意欲を取り戻していくストーリーはそれなりのものだから、もう少し掘り下げてよかったのでは・・・？

他方、本作の冒頭から提示される、なぜみゆきは毎週末夜行バスで東京に行き、デリヘル嬢をしているのか、という「問い」に対する明確な「答え」は私には導き出せない。父親と2人で食事をしている時にみゆきのイライラが最高潮に達し、「みんな勝手！」と叫んで飛び出していくシーンを見ていると、これは単なるヒステリーではなく、彼女の心の叫びであることがよくわかる。ひょっとして、東京でのデリヘル嬢勤めは、津波で死んでしまった母親と一緒に死ぬことができなかった自分を責めたり傷つけたりするための手段・・・？もっとも、もしそうだとするとデリヘル嬢をやりながら「本番は絶対ダメ！」と条件をつけているところを見ると、まだまだ常識的な生き方からのレッドラインは越えられない程度の決断・・・？そうかと思うと、他方で山本にあんなに大胆な告白をすることができたのは一体何故？男の私にみゆきの心情を正確に理解することができないのは仕方ない。また、ひょっとしてみゆき自身も自分の行動の意味が十分わかっていないのかもしれないし、自分の気持ちの整理を十分つけられていないのかもしれない。

本作では、みゆきが1人でバスに乗って被災地と東京を往復するシーンがやたら多く登場するが、そこでは当然セリフは全然なく、スクリーン上にみゆきのクローズアップの姿が映し出されるだけだ。私がこの女優がグッドだと思ったのは、そのクローズアップの映像にみる瀧本公美の表情だが、残念ながら私にはその心の中を見通すことはできない。さて、あなたはこのヒロインの心の再生をどう考える？

## ■□■このタイトルをどう考える？■□■

最後に興味深いのは、本作の『彼女の人生は間違いじゃない』というタイトルをどう考えるかということだ。これは弁護士の語彙感覚でいうといかにも中途半端で解釈の幅が広く、言ってみればずい表現。つまり、廣木監督はみゆきの生き方を興味深く見守りつつ、みゆきのそんな生き方は「それで正しい」とも「間違っている」とも言い切れず、『彼女の人生は間違いじゃない』としか言えないわけだ。もちろん、自分の娘がみゆきのような行動をしていけば、父親は必ず「お前の人生は間違っている」と言うだろうが、他人の娘であれば、『彼女の人生は間違いじゃない』ということになるのだろう。

震災に関する法律問題をたくさん執筆する中で被災者支援のあり方についてもいろいろ考えている弁護士の私としては、そんなこんなをいろいろ考えながら、本作のヒロインみ

ゆきの生き方についてしっかり考えるとともに、本作タイトルの絶妙の「バランス感」を高く評価したい。

2017（平成29）年7月28日記